

正 誤

一枚表七行所ハ質。八枚表末行不通ノ下免ハ免。九枚表八行者ハ着。全裏二行リハル。  
 全四行カハカ。十一枚四行項ハ頃。十二枚表九行双ハ奴。十八枚裏末行村ハ松。二十  
 二枚ノ裏初行ハ事。二十五枚表十一行屢ハ属。三十一枚表末行表中負擔戸數ノ欄厘。  
 ハ戸。三十二枚表備考三行石ハ升。三十九枚裏六行ルハリノ誤。一枚ノ裏一土地等ノ  
 下級。三枚初行末ノ下年。七枚ノ表六行ケノ下テ。全八行重ノ下キ。十七枚表九行列  
 ノ下セ。十九枚表三行棟ノ下札。二十三枚二行戸ノ下長ヲ脱ス。九枚表四行ミハ衍  
 四枚表十行十ノ下ニテ脱ス

知夫郡浦郷村要録主意

不肖明治三十二年十一月廿三日時ノ戸長岩佐郎君

三隨從本村事務ノ末班ヲ汚ス事トナリタリシモ素ヨリ

無智識ノ某成算ナクシテ來任シタルヲ恥テ朝夕憂苦

三堪ヘス故ニ於テ村民ニ謝スルノ寸志トシテ不肖ガ見聞

セシコトヲ集録シ名ケテ知夫郡浦郷村要録ト云フ之レヲ  
 印刷ニ付シ配分スルコト、ナシタルナリ勿論誤謬脱落等  
 ノ多キハ調査日時ノ短キト古書類ノ徵スルモノ少キトニ  
 因ルコトナレバ後日識者ニ於テ改削増補アリテ不肖ガ微  
 志ヲ遂行セラレシコトヲ切望ス

明治三十四年一月

編者 識





知夫郡浦鄉村要錄

凡例

- 一 此書ハ專ラ既往ノ事跡ヲ集纂シ以テ後世ニ傳ヘ人智ノ進否ヲ對比スルノ便ニ供スルヲ以テ本旨トス
- 一 本書ハ專ラ古書類及ビ口碑等ニ依リ編纂シタルモノナレバ其及バザル所並ニ誤謬等ハ他日ノ増補訂正ニ讓ル
- 一 編次ハ部目ヲ設ケテ列記ス



知夫郡浦郷村要録

目次

地勢及位置	管轄沿革	部落及人口戸數
浦郷村長役人	民情	交通
社寺	舊跡	教育
農業	漁業	牧畜
衛生	村經濟	勞役賃金表
米價調査	物産	從軍者
獻金者	効績者	日本赤十字社員
飢饉	雜部	

知夫郡浦郷村要録

地勢及位置

浦郷村ハ隱岐國ノ西南ニ位シ東ハ知夫郡美田村字久留居坂ヲ以テ全村ニ界シ東南ハ全郡美田村焼火山及知夫島ニ對シ一ノ内海ヲナシ西南北ハ大洋ニ枕ミ東西壹里貳町五拾八間南北貳里七町貳拾六間周回七里貳拾町四拾參間參尺(農商務省地所調査圖ニ因リ算定シタルモノナリ)其間山峰連亘シテ峻嶮ナリ平地ハ稀少ニシテ其地味ハ黒色ナル填土ナリ水利ニハ便ナラサルヲ以テ田地少シ道路粗惡ニシテ行路難ハ今尙ホ面目ヲ改メス然リ而シテ其形新月ヲナシタル天然ノ良港ヲ備ヘ東西ニ航海ヲナス大小船舶出入自在ニシテ實ニ北門ノ錯鑰港タリ



一明治九年ニ土地ノ改正アリ明治二十年ニ地押調査アリ  
其成績左ノ如シ

年別	田		畑		郡村宅地		其他	
	反別	地價	反別	地價	反別	地價	反別	地價
明治拾七年	一五三、八三〇	一、八〇三、八三〇	八八四、五〇〇	九、三五四、四〇〇	七九、六〇六	九六三、六三九	五八六、八三七	一四六、〇七
全 廿二年	一九、〇〇〇	一、八七〇、三五〇	一〇〇〇、八〇三	九、八八〇、六八八	一〇四、七〇五	一、二二七、八三五	六六六、七二	一三一、九九九
全 卅三年	一五八、六五	一、八七〇、〇九七	一〇〇〇、三三二	九、八五一、六七三	一〇六、三二	一、三三六、五五六	五九九、四三九	一三一、三三七

一土地等地價表

(田畑郡村宅地ハ壹反歩當  
山林及雜種地ハ壹町歩當)

等級	地目	田	畑	郡村宅地	山	林	雜種地
一		二五、二八七	九、二五六	二二、〇〇〇		五、二九〇	五、〇〇〇
二		二一、九九一	八、四二五	一八、二〇〇		三、三三〇	三、五〇〇
三		一九、二四〇	六、九四五	一三、四一〇		二、四五〇	三、五〇〇
四		一二、三六八	五、五七九	七、六八〇		二、三九〇	
五		六、〇四七	三、一八八	四、八一二			

一山ハ名ヶ床 (横越山)水直高サ二百二十四米突ナリ (農商

務省地質調査所調)

参考

島前各島山峰水直高調

所	在	地	山	名	水	直	高
美	田	村	燒	火	山		五二五 米突
別	府	村	高	崎	山		四四六
知	夫	村	赤	ハ	山		三七八
福	井	村	安	答	山		二五五



海士村	金山	二三四
浦郷村	横山越	二二四

(明治廿九年農商務省地質調査所調)

管轄沿革

往古ノコトハ之レヲ知ルノ材料乏シキト雖トモ隱岐國御支配ノ起リハ人皇十六代ノ帝仁徳天皇ノ御宇武内忠義公御入國夫ヨリ御支配續テ四百五十三年神平元年ニ至ル天平二年ヨリ隱岐治郎右衛門殿御入國夫ヨリ御支配續テ百三十三年治部少輔殿御時代延喜四戌年ニ至ル延喜五年巳二月ヨリ佐々木隱岐守御入國夫ヨリ御支配續テ四百三十五年佐々木隱岐判官御時代正慶二年ニ至ル建武元年尼子民部少輔殿御入國夫ヨリ御支配續テ二百三

十六年尼子正ノ五郎殿御時代天正拾壹未七月十五日ニ至ル天正拾壹年八月三日ヨリ安藝ノ廣島内取吉川駿河ノ守殿御内廉宗次郎殿御入國夫ヨリ御支配續テ拾六年慶長三年ニ至ル慶長四年亥冬ヨリ堀川帶刀雲州へ御入國夫ヨリ御支配續テ三十五年寛永拾年ニ至ル池田出雲守殿小出大和守殿古田兵部少輔殿へ御預ケトナル寛永十五年寅二月ヨリ松平出羽守御預リニ被成御受取ニ宮崎源太左衛門殿山瀬九郎右衛門殿御渡海被爲若狹守殿御内坂井庄石衛門殿ヨリ御請取御支配續テ五十年ナリ元錄元年辰ノ夏ヨリ御代官由比長兵衛殿御預リトナリ松



平出羽ノ守様御内大塚吉兵衛殿中西文右衛門殿間宮喜右衛門殿ヨリ御受取被成御代官御支配續テ三十二年ナリ享保五年子八月ヨリ松平出羽ノ守様御預リニ被成石川御代官武田喜左衛門殿御内西村武助殿佐野武太夫殿松浦豐太夫殿ヨリ全廿三日ニ出羽守様御目付松平源太夫殿御郡代村尾皆右衛門殿御代官豐島奥左衛門殿和田四郎太夫殿御受取ナサレタリ

徳川幕府ノ時出雲石見ニ隸スルモノ各前後兩回ナリ王政復古即チ明治元年鳥取藩ニ管セシメ尋テ隱岐縣ヲ置キ既ニシテ廢シ大森縣ニ併セ更ニ島根縣ニ合シ復鳥取縣ニ隸シ後改メテ島根縣ヨリ統治セリ(知夫村沿革誌ニヨル)

隱岐國行政事務分掌監督スル爲メ隱岐支廳アリ后改メテ

周吉穩地郡役所ヲ置キシカ明治二十一年ニ至リテ之レヲ廢海士知夫郡役所トナシタリ共ニ之ヲ西郷港町ニ置キタリ

シ隱岐島廳トナシタリ共ニ之ヲ西郷港町ニ置キタリ

本村行政事務ヲ主管スル爲メ明治十二年六月戸長役場ヲ本郷ニ設ケ明治十七年之レヲ美田村ニ合シ聯合村戸長役場トナシ復タ明治二十五年一月一日分離シ浦郷村戸長役場ヲ設置シ以テ本村ヲ管轄ス

部落及人口戸數

一浦郷村ハ往古ヨリ村名改稱或ハ分合等ヲナセシコトナクシテ左表數里ヨリ成立ス

明治五年十月末日調各里別戸數人口表

戸數	里名				計
	本郷	赤ノ江	三度	珍崎	
二二四	七二	五七	五四	三九七	



年別	人口	
	男	女
明治廿三年	五一九	四九二
全 卅一年	一七六	一九三
全 卅二年	一六六	一六七
全 卅三年	一二八	一四四
合計	九八九	九九五

年別人口戶數表

年別	戶數		人口		合計
	男	女	男	女	
明治廿三年	四八七	四八五	一、二八一	一、三三四	二、六一四
全 卅一年	五〇二	五〇二	一、三二五	一、三六〇	二、六五九
全 卅二年	五〇五	五〇三	一、三三二	一、三八二	二、七〇四
全 卅三年	五〇六	五〇二	一、三三九	一、三八一	二、七二〇
全 卅四年	五二二	五二二	一、三七〇	一、三九七	二、七六七
全 卅五年	五二五	五二五	一、三八七	一、四一九	二、八〇六
全 卅六年	五一九	五二〇	一、四二二	一、四三七	二、八三九
全 卅七年	五一〇	五一〇	一、四四七	一、四四三	二、八九〇

出生及死亡人口

年別	出生		死亡		合計
	男	女	男	女	
明治廿三年	四六	三一	三一	二二	五二
全 卅一年	三七	四七	一六	一五	三一
全 卅二年	五一	六〇	一九	二七	四六
全 卅三年	四四	三六	五一	四七	九八
全 卅四年	三三	三四	五二	五七	一〇九
全 卅五年	三六	三二	一四	一二	二六
全 卅六年	五四	四一	一八	一七	三五
全 卅七年	四三	四五	二二	二二	四四
全 卅八年	四九	三五	二九	一八	四七
全 卅九年	四八	五二	三四	二三	五七
合計	四四〇	四一三	二八六	二五九	五四五
平均數	四四	四一	二九	二六	五五
生殘差引増	一五四	一五四	三〇八		



備考

明治廿六年全廿七年死亡者ノ多キハ赤痢病傳染蔓延セルニ因ル

浦郷村長役人

本村ヲ支配セル長役人ヲ列舉スレバ概テ左ノ如シ(散在セル古書類ニ因ル)

役名	年	代	姓名
公文	寛永十二年		村尾兵衛元重
公文	貞享元年		村尾安右衛門
庄屋	元禄元年		不詳
庄屋	正徳三巳年		村尾祐三郎
庄屋	元文六年		岡田五左衛門
庄屋	元文六年		眞野丹次
庄屋	寶曆二年	(崎村)	渡邊助藏
庄屋	安永九庚子年		渡邊伴三郎
庄屋	寛政三年		渡邊龜之進
庄屋	享和三年		渡邊彌左衛門

庄屋	文化五年		渡邊廣十郎
庄屋	文化六年		渡邊覺之進
庄屋	右覺之進改名セリ天保十四年二月十九日死亡		渡邊源三
庄屋	天保十四年二月十九日		渡邊源三
庄屋	自天保四年二月十九日至安政二年九月廿五日		渡邊義藏
庄屋	安政二年九月廿五日		渡邊一郎
公文	明治三年		渡邊一郎
村長	明治五年		渡邊一郎
副戸長	明治六年四月十日		渡邊一郎
戸長	明治七年五月		渡邊一郎
戸長	明治十二年四月卅日		渡邊英夫
明治十七年美田村外三村聯合戸長トナル			
戸長	明治廿五年一月二日	役場分離	森脇平作
戸長	明治三十一年五月二日	就任ス	青木啓四郎
戸長	明治卅一年六月八日		原田七衛



戸長	明治卅二年十一月十五日	岩佐久一郎
戸長	明治三十四年一月十四日	平田正表

民情

一村民ハ古來教育ノ何タルヲ辨スルモノ殆ントアルナシ故ニ人智ノ發達ヲフ問題ハ曾テ口ニシタルモノナシ實ニ痛歎ク至リナリ之レニ加ヘテ幕府ノ政事ハ慥カニ愚昧ノ民ヲ作りタルモノ、如シ

參者

書ヲ讀ミ字ヲ書キ得ル者一書ヲ讀ミ字ヲ書キ得サル者

男	四一	女	一	男	五七一	女	六七〇
---	----	---	---	---	-----	---	-----

備考

明治十四年調査ニシテ滿二十歳以上ノ者ニ對スル分ナリ

一村民(獨リ本村ニ限ラス)幕府ノ役人ニ對スル有様ハ現今

之レヲ考フルトキハ實ニ馬鹿毛切テ噺ニナラヌガ衆民中何カ一言デモ巳ノ意見ヲ述ヘントシテ其役人ニ反問スルコトアレハ無禮者ノ一言デ後ハ賄賂ノ彼是レヲ視ルニアラサレバ放免スルコトヲ得ス若シ一步ヲ誤レバ首ト胴トハ其所ヲ異ニスルコトアリ理非ノ判スル所黃白ノ輕重ニ依テ定マル之レヲ名ケ暗國時代ト云フ(温古知新)之レヲ思ヘハ如夢(現實)

一婚儀 抑モ婚儀ハ人倫ノ大本ニシテ最モ重式典タリ然ルニ古來婚儀ノ有様ヲ視レバ其多數ハ私通密々談合ヲナシ父母親戚ニハ何ノ噺モナク潛密ニ夫家ニ連レ歸リ寢ニ就カシメ巳(夫)ハ若者集合宿ニ行キ知ラヌ顔ヲシテ居ルト彌々夜ノ明クルニ至レバ嫁女起出ツ家内ノ者驚



キナガラ之レヲ糺セバ其嫁女ナルコトヲ知ル夫ヨリ公然使ヲ以テ嫁女ノ両親ニ對シ婚姻ノ承諾ヲ求メ之レニ應スルアレバ茲ニ始メテ確定ス  
以上ノ如ク何カ故ニ不順席ナル契約ヲ爲スカト云フニ其重ナル原因ハ古來無智ノ壯年輩他ニ高尙ナル世事ヲ知ラス暴行蠻行ハ彼輩ノ特長ニシテ獨リ天下ニ敵ナシト誇言スルニ至ラシメタル結果ニシテ彼等ヲ恐ル、コト蛇蝎モ唯ナラス彼等ノ徒ラハ延イテ彼ノ婚姻ニ及ビ其嫁入アルヲ聞知ルニ於テハ其婚家ニ對シ石地藏ヲ運ヒ石材ヲ運ヒ船ヲ運ヒ橋ヲ運ヒ便所ヲ破壊シ糞桶ニ石ヲ投入シ其亂暴言語ニ絶シタルヨリ之レカ避難ノ爲メ秘密ヲ事トシタルヨリ終ニ之レカ習慣トナリ今日尙ホ

其幾分ヲ持續セシモ早晚除去シサラル、コト、信ス  
一嘉永貳年外國船來航ノ顛末

嘉永二年酉早春異國船見ヘ候ヘハ可届出旨御達アリシニ間モナク同年三月黒船三度港沖合ニ見ユルヤ否ヤ暫クノ間ニ港口ニ至リ碇船シ一ノ端船(ボート)ヲ卸シ五六人水夫ト思シキ者之レニ乗シテ上陸ス里人ハ異人種ニ驚怖遁逃シ其混雜名狀スヘカラズ時ニ其里年寄役雄太夫ハ本郷庄屋役宅ヘ會合ノ爲メ出張留主中故無止其長男松之進(現今小出正直)小物一名引連レ應接トシテ濱邊ニ至レバ彼ノ水夫ラシキ者ハ濱邊ニ残り居タル少數ノ小兒ヲ愛シテ居ル模様ナリ依テ來意ヲ問ハント欲スルモ言語不通免ヤ角スル内砂上ニ文字ヲ書セントスルモノ、如



シ故ニ硯紙筆ヲ出シ與ヘシニ西洋文字ヲ以テ長文ヲ認  
メ差出セシモ之レヲ讀ムコト能ハズ松之進ハ無止手眞  
似ヲ以テ間ハントスルニ彼水夫亦掌ヲクボメ呼吸シテ  
帆ニ風ヲ入レ船ヲ奔スル様ヲ爲セリ依テ來リシ方角又  
去ル方角ヲ間フニ南西ヨリ來リ北ニ向テ去ルトノ形様  
ヲ爲セルモ亦西ニ向フテ彼ノ手眞似ノ如ク掌ニ呼氣ヲ  
吹ケハ彼レ頭ヲフリ又々北ノ方へ走ル形ヲ爲ス彼ノ携  
へ居ル刀様ノモノヲ以テ我々ヲ切ラントスルカノ如ク  
セハ又頭ヲフリ手ヲ以テ鯨ガ潮水ヲ吹き波上ニ出デウ  
チウチスル走ルモノヲ切ル手眞似ヲナス故捕鯨スル異  
人ガ陸上見物ナラン別ニ水ヲ求メス薪ヲ求メスシテ水  
夫モ面白キコトニヤ陸上ヲ徘徊シテ本船ニ歸ルコト遅

クナリシニ依リ本船ニハ之レヲ氣遣フテカ第二ノ端船  
ヲ御レ港内ニ漕寄セントスルトキ第一ノ端船本船ニ歸  
ラントスル中途ニ於テ出逢供ニ本船ニ歸リ直テニ拔錨  
北方ニ向ツテ航行セリ

以上ノ如クニシテ恐ルベキ者ニアラザルコトヲ智得ス  
ルヤ曩キニ遁逃セシ里人歸宅悉ク濱邊ニ集リ蘇生ノ思  
チナシタリ

右者船拔錨共詳細本郷庄屋役宅へ届出テタリ茲ニ於テ  
巡回中ノ郡代代官ハ本郷ヨリ直テニ該船ノ行先見届ニ  
就事セラレタリ（小出正直君ノ筆書ニ依ル）

因ニ記ス時ノ郡代代官ハ憶病無双不決斷ノ者ニシテ  
此報ヲ聞クヤ狼狽ヲ極メ夫レ甲胃ト云へバ鎧櫃ハ空



ニシテ武器ナシ夫レ早船ヲ支立テ西郷ヘ遣リ其狀見  
リモ氣ノ毒ト云有様ニテ面色ハ殆ント土ノ如シト云  
フ然ルニ今拔錨ト聞クヨリ勇氣舊ニ百倍シ巳レ何處  
マデモトカ身ミタルトハ如何ニモ當時ヲ寫シタルモ  
ノナラン

右船ハ亞米利加ノ捕鯨船ナラントノコトナリ  
本件外國船ニ對スル賞典トシテ左ノ通辭令アリタリ

覺

浦郷村

年 寄 雄 太 夫

右者去春異國船相見候節心配相働候ニ依テ譽遣之旨  
被仰渡候段申來候

嘉永三年戊五月廿日

岸 田 善 藏 書 判

山 田 七 左 衛 門 書 判

大庄屋峰三郎殿

一 年 巳 十 二 月 廿 日

年 同 寄 雄 太 夫

數年來格別實町相勤御用向ハ勿論村方締合等之儀打  
込リ令心配候段神妙之至リニ候依之爲褒美遣之有之  
趣可申渡候以上

渡 部 扇 藏 書 判

佐 藤 織 月 書 判

大庄屋官藏殿

一亂暴 明治廿三年八月ノ候隱岐國及伯耆國境港間定期



航海氣船隱岐丸乘客中ニ虎列拉病患者一名發生シタルヲ以テ之レカ上陸ヲ爲サシメントノ相談始マルヤ本郷里民ハ之レヲ上陸セシメテハ直チニ病毒蔓延スルカノ如クニ思ヒ一生ヲ賭シテ其上陸ヲ拒ミ若シ強テ上陸ヲ爲サシムルニ於テハ吾ニ腕力アリ飽マテ初志ヲ達セシメント反攻シ其様如何ニモ驍然タリ或ハ箝籜ヲ掛テ竹鎗ヲ携ヘ日吉神社境内へ集合スル者舉村一致ト云フ方ナリ警察吏モ役場吏モ何ノ盡スヘキ途ナケレバ只其暴舉ヲ制セント千々ニ心ヲ困シムルノミ然ルニ該患者モ稍々病勢衰退ノ模様アルニヨリ氣船ハ其儘出港トナリタレバ此暴舉ハ茲ニ創メテ治定セシカ其第二ニ起ル問題ハ其善後策ニシテ之レカ爲メニハ部内上流者ノ頭上ニ

ハ慥ニ起死回生ノ大鍼針術治療ヲ受ケ舊來ノ陋習ヲ破ルノ行路ヲ發見シタルナラン然リ而シテ此事局ハ終ニ警察ノ説諭ヲ受ケ放免トナリタル次第ニシテ是等ノ事件ハ明治ノ初年頂隱岐國變動事件后ノ珍事ナリ部内ノ民情ハ概略以上ノ如クニシテ諸般ノコト推測スルニ難カラス然リ而シテ有志者ハ前項ノ如ク不覺ヲ取リタルヲ悔エ茲ニ大ニ悟ル所アリテカ戸長役場分離ノ事ニ着手シ官廳モ本件ヲ採用シテカ明治廿五年一月一日ヨリ知夫郡浦鄉村戸長役場開設セラレ其戸長ニハ森脇平作氏ヲ以テ任セラレタリ氏ハ此ノ荒廢セル村政ニ着手シ其内種々様々ナル困難ニ遭遇スルコト亦少シトセス然リト雖モ氏ノ英斷ハ是等ノ困難ヲ排シ日尙ホ



淺キニモ拘ラス諸般ノ整理ハ一躍シテ隱岐全島ニ其範  
ヲ示スニ至リタリ其間火災アリ病災アリテ連年ニ亘ル  
モ善ク其秩序ヲ保テ今日アルヲ視ルニ至ルハ有志者ノ  
力アルコト勿論ナリト雖トモ森脇氏ノ如キ戸長ヲ得ル  
ニアラザレバ爲シ能ハサルノ業ナリ今其重要ナル成績  
ヲ掲クレハ左ノ如シ

村政ノ整理 教育ノ發達 勸業ノ振興

勤儉貯蓄 病院ノ開設 義勇會ノ組織

電信線ノ架設

一 密賣婦 本村ハ港灣好良ナルニヨリ大小船舶ノ出入敏  
繁ナルヨリ自然無教育ナル家庭ニ養育セラレタル女子  
ハ古來ノ惡風ヲ繼襲シ女徳ヲ破アリ下賤ナル密賣婦ト

ナリ官ノ懲罰ヲ幾度受クルモ鐵面皮ニシテ平氣ナル動  
物ナルニハ如何ニモ痛歎ノ至リナリ是等ノ惡弊ヲ除去  
セシニハ一ノ工業ヲ興シテ以テ之レヲ利用シ社會ノ福  
利ヲ増進スルノ途ヲ講セザルベカラサルモノト信ス  
一人情 維新前ハ概シテ無智文育事理ノ辨別力ニ乏シク  
幕府官吏ノ暴命ニ屈從スルコトヲノミ勉メタル可憐ナ  
ル民衆ナリシガ明治維新ニ當リテ漸ク民權開發ノ緒ニ  
就キ次第ニ進ンテ自由ノ權利ヲ振張スルニ至リタレハ  
茲ニ亦人情一變シテ一種ノ狡智ヲコト、スル双(狡)獠代  
言(輩)出シ日本固有ノ道義モ誠心モ腐敗セシメ復タ本回  
スルノ途ナキ迄ニ至ラシメタルハ世ノ變轉人力ノ如何  
ントモスルコト能ハサル折柄世ハ漸ク進ンテ明治二十



三年ニ至リ憲法ハ實施セラレ帝國議會ノ開設トナリテ  
大ニ民權亦擴張セリ教育ニ關スル勅語ハ喚發セラレ  
社會ノ風潮ハ亦一變シテ德義ヲ重シシ道理ニ依テ權利  
々益ヲ得ルニアラザレバ世ニ處スルノ途ヲ失フニ至ル  
コト、ナリタルハ實ニ慶賀ノ至リナリ  
明治廿七八年日清事件ニ際シテハ大ニ敵愾心ヲ興シ或  
ハ出征軍人ノ遺族ヲ扶助シ或ハ軍事公債ノ募集ニ應シ  
或ハ日本赤十字社ニ加盟ヲナシ其爲ス所一トシテ義舉  
ニアラザルハナシト認メラル  
明治三十三年清國事件ニ就テモ村民一致協力シテ出征  
軍人ノ遺族ヲ扶助シタリ  
以上ノ如ク美舉ハ如何ニモ美舉ニ相違ナキモ其意必ズ

誠心誠意ナラサル可カラズ乞フ三思三省セラレテ可ナ  
リ  
目下ノ民心ヲ概評スレバ即チ已レアルヲ知リテ他アル  
ヲ知ル者少シ人ニ誘導セラレバ進ムコトヲ知ルモ人  
ヲ善ニ導クモノ亦少ナカラシ然レモ先導者ニ從ヒ進行  
スルコトヲ得ハ大ニ社會ノ進歩ト云フベキナリ  
交通

一往古ハ交通ノ不便ナルヲ尤モ甚シ殊ニ本土トノ交通ハ  
漁船ニ仕立ナシ僅カニ物品ノ交換ヲナスアルモ信書  
ノ送致ニ至リテハ其便絶テナカリシガ明治五年五月一  
日ヨリ郵便局開始アリシモコト創業ノ場合ナレバ到底  
頼トスルニ足ラス殊ニ隱岐國ト本土トノ郵便航送モ幸



便ヲ待テ之レニ差立ツルヲ以テ東京本村間信書ノ往復ハ廿日若クハ三十日甚シキニ至リテハ二三ヶ月ヲ經過シテ始メテ到達スルアリ亦達セサルモノモ多々アルノ有様ナリキ茲ヲ以テ明治十二年一月五日周吉穩地郡役所海士知夫郡役所ハ郵便ノ便ニ満足セサルヲ以テ郡役所戸長役場間毎月七回定飛脚ヲ巡回セシメ信書速達ノ方法トセラレタリ依テ以テ郵便事業ノ程度ヲ伺フニ足ル本村郵便局ノ開始ハ明治拾四年一月十九日ニシテ是レヨリ進ンテ事業モ稍々發達シ明治拾八年六月廿五日ニハ郵便貯金取扱ノ途モ開ケ明治十九年頃ヨリ幸便航送ヲ廢止シ汽船定期航海ノ途開ケタルヲ以テ之レニ航送方ヲ爲サシムル様ニナリタルヲ以テ大ニ前日ト其趣キ

ヲ異ニシテ社會ノ信用ヲ得ルコト、ナリタリ明治廿三年十一月一日ニハ郵便爲替取扱開始トナリ明治廿九年七月一日ニハ小包郵便ノ取扱開始明治三十三年九月廿日ニハ電信線開通ヲ見ルニ至リタルハ之レ實ニ文明ノ賜ナリト云フヲ得メシ

參考

別紙之通御達ニ相成候條此段相達候間本文御承知ノ上御願達見留方  
■リ早々御返却可有之事

別府四等郵便役所印

別府美田浦郷船政所御中

(別紙)

別府郵便取扱所



隠岐國各郵便取扱所ヨリ伯耆國境同取扱所迄ノ郵便御用物便船ニテ  
差立候御規則ニ付帆ノ節ハ其都度最寄取扱所へ船頭罷越シ御用ノ  
有無承候上出帆候様兼テ相違置候得共無其儀御用向差支甚ク不都合  
ノ事ニ候自今出帆免狀受取候節左ノ雛形通リ切符船政所ニ於テ相渡  
候尤モ風波ノ模様ニ寄幾分カ相立候トモ揚錨ノ前取扱所へ差出候ニ  
付御用物並ニ切符へ有無トモ相記シ直ニ可相渡事

但本月十五日ヨリ切符相渡候事

鳥年  
十二月五日

鳥取縣隠岐支廳

(雛形)

美濃縦横八ツ切

何月何日

船政所印

一何丸

隠岐國何郡何村  
船頭何

ノ誰

御用物相渡候或ハ無之候也

何月何日

取扱所印

社  
寺

一由良姫神社 祭神須勢利比女命(又天造日女命)

位置 浦鄉村字由良浦

創立 年月日不詳古傳説ニ曰ク神武天皇ノ御宇此神柔

魚ヲ御手ニ持テ賜ヒ苧桶ニ乘御當村ノ西貳町計リ字

由良浦疊石ト云フ所ニ出現シ給フト言ヘリ又或説ニ

寛平七乙卯年當村鎮座マシマストモ云ヘリ

由緒大略 古傳説ニ曰ク往古此神苧桶ニ乘御當國へ渡

御ノ節瀛中ニ於テ海水ニ御手ヲ洗ヒ玉ヒシトキ柔魚

御手ニサハリケルヲ御怒リマシマシテ引寄せ玉ヘリ

其縁ニヨリテ今尙ホ毎歲十月ヨリ十二月晦日ニ至ル



ノ間由良浦ニ柔魚寄り來ル古ヨリ變ルコトナシ就  
中十月廿九日ニハ此里ニテ神歸リト唱ヒ御座入ノ神  
事ヲ執行ス此夜御靈驗ニヨリ必ス多少ニ拘ラス寄り  
來ル之ヲ神歸ノ証ナリト稱フ村民ハ此夜ヲ始メトシ  
毎夜爭フテ此浦ニ至リ柔魚ヲ拾捕ル是レテ以テ俗ニ  
鰯大明神ト稱フ又航海ノ船舶ヲ守護シ賜フ神ナリ舊  
事本記第九ニ天造日女命在沖城玲瓏宮立燈守船ノ大  
神トアル是ナリ

沿革ノ大略 延喜式神名帳ニ由良姬神社(名神大元名)トアリ又續日本後記承和九年乙巳九月隱岐國知夫里郡由良姬命神預宮社トアリ一宮記ニ由良比女神社大巳貴命嫡后須勢利比女ノ命也トアリ古來當國一ノ宮ト尊

崇セリ明治五年拾月郷社ニ列セラレ  
重ナル神器寶物左ニ

苧桶

壹個

但楸形ニシテ口径五寸一分深サ二寸六分木質不詳  
古傳説ニ此神當國へ渡御ノ節乘リ玉ヘシモノナリ

神鏡

壹面

但徑八寸量目百八十匁銘藤原吉重安永二巳八月當  
村來海角五郎寄付傳來及由緒不詳

神鏡

八角形

參面

但大中小アリ大徑三寸四分量目四十八匁中徑二寸  
九分量目二十七匁小徑二寸五分量目二十一匁製作



人由緒傳來不詳古傳記ニ曰ク此神鏡ハ本社當國一ノ宮ト定メラレタルキ下賜セラレタルモノナリト  
土玉附縁記  
壹 個

灰色ノ土ニテ作りタル玉ニシテ周圍八寸五分唐金地寶珠形ノ器ニ容ル元祿七年戌十月從五位伊豫守忠興寄付

中臣拔詞

壹 卷

但元祿九年十月江戸橋三善寄付由緒傳來不詳

祭禮序

壹 卷

但安永四乙未年七月隱岐國造藤臣幸正選並書

刀

壹 口

但長壹尺七寸豐后守行長作文化五年辰九月當村渡

邊廣十郎寄附由緒不詳

刀

壹 口

但長壹尺八寸五分備前國長船清光作由緒傳來不詳

刀

壹 口

但長二尺四寸銘長船祐定作由緒傳來不詳

右神職ハ代々繼續當代社司眞野源太郎氏ナリ

一日吉神社 祭神大山咋命(舊帳ニハ祭神不詳ト雖ヒ土人ノ口碑ナリ)

由緒 以前山王權現ト稱セシヲ明治五年十月神社取調

ノトキ日吉神社ト改正村社ニ列ラレタリ古老ノ傳ニ

往古近江國甲賀郡眞野ノ庄ニ鎮座アリシヲ該社譯部

眞野宗源(藤原ノ朝臣眞野左京之助久綱ノ孫)ナルモノ兵亂ヲ避ケンカ爲

メ奉仕ノ氏子ナルヲ以テ末社八王子神ト共ニ是レナ



奉シテ當國へ渡リ浦郷ニ鎮リマサシメ(年詳號)故ニ社地ヲ宮前ト云フ

編者附記ス以上ノ緣故ニ因リ眞野宗源ノ家ノ系圖ヲ掲ケテ參考ニ供ス

(眞野宗源ノ系圖)

隱岐國島前千波郡浦之郷中原眞野氏代々記録ノ事元祖藤原ノ朝臣眞野左京之助久綱幕紋藤左巴也本國近江國甲賀郡眞野庄人也本系圖次第雖有之一亂ノ刻紛失了今改テ代々載死後者也

代數	死亡年月日	編者推定年月日	氏名
一	子八月十六日	治曆二年八月十六日	眞野宗源
二	亥八月十五日	康和四年八月十五日	長門守

三	午二月八日	長承三年二月八日	全	左京之助
四	未七月十五日	永曆元年七月十五日	全	左京之助
五	丑七月十五日	建久二年七月十五日	全	常仲
六	寅正月十九日	安貞三年正月十九日	全	左京之助
七	申十月十八日	文永九年十月十八日	全	左京之助
八	巳八月三日	嘉元二年八月三日	全	左京之助
九	酉正月六日	元弘三年正月六日	全	左京之助
一〇	辰二月八日	正平八年二月八日	全	左京之助
一一	未七月九日	應永元年七月九日	全	左京之助
一二	寅四月七日	應永卅二年四月七日	全	左京之助
一三	寅十一月廿日	寛正元年十一月廿日	全	左京之助
一四	卯九月三日	永正十二年九月三日	全	左京之助
一五	戌十一月五日	永祿三年十一月五日	全	左京之助
一六	慶長二酉天正月十九日		全	左京之助



一七	正保元申天三月廿九日	全	左京之助
一八	慶安四卯五月八日 七十四	全	左京之助
一九	寛文四年正月五日 五十六	全	左京之助
二〇	寶永七寅十一月廿六日 三十九	全	左京之助
二一	寶曆十辰天十二月三日 六十三	全	左京之助
二二	明和九卯天十二月三日 六十九	全	左京之助
二三	享和亥天閏正月廿一日 五十五	全	左京之助
二四	文化十九寅天正月六日 四十一	全	左京之助
二五	安政六未十月九日 七十八	全	左京之助
二六	明治六年甲酉八月八日 六十七	全	左京之助
二七	當代 六十九	全	治郎一

備考

初代死亡ノ年ヨリ明治三十三年迄概數八百三拾五年ナリ

一村尾神社 祭神猿田彦大神

合殿 宇禰美神社 祭神天鈿女命  
千箭神社 祭神天照大日靈貴命

由緒 創立年月日不詳只元祿以來ノ棟ニ奉再造營待場  
大明神ト記載有之而已

一聖神社 祭神事代主神

由緒 不明

一茂理神社 祭神句句迺馳命

由緒 不詳

明治五年十月村社ニ列セララル

一專念寺 淨土 總本山智恩院末平野山一心院

專念寺 本尊 阿彌弛如來

由緒 往古美田村字波止里ニ有ト云ヘ傳ヘ聞ク



御宇慶長拾壹年ノ頃開山狹蓮社善譽上人哲道大和尚  
ト云フ 維新ノ際明治二年當國內亂ノ時佛道不歸依  
ヲ稱シ國內一般廢寺ト相成候故舊記等滅却ニ付不詳  
同拾年内務郷ノ内意ニ依テ諸宗一時ニ當國布教ノ爲  
メ始メテ僧侶派出ノ處同拾壹年拾二月三日浦郷ニ止  
リ仮説教所設置ノ處同十三年十月廿日洛東五條坂西  
光寺住職醍醐須忍當國派出巡回ノ處同十二月六日當  
村ニ止マリ本堂庫裡更ニ建立同二十一年九月三日付  
ヲ以テ專念寺ト公稱許可(付記ス醍醐須忍ハ  
第二ノ開山ナリ)  
明治二十四年十二月十一日本堂庫裡トモ全燒セリ原  
因當時浦郷小學校建設中ニ付仮校舍ニ充用中爐底燒  
拔ケ床下ニ貯藏ノ木炭ニ火移リ夜中ニ至リ大火トナ

リタリ其時ハ本尊ヲ始メトシ殘リシモノハ殆ントナ  
シ

### 一 常福密寺

由緒 隱岐往古記ニ曰ク人皇五十二代嵯峨天皇ノ御宇  
弘化八酉年國主四代目義秀之時代弘法大師當國へ御  
渡海ノ頃建立即チ大原山常福寺ト號ス彌弛、觀音、勢至、  
之三尊安置スル由見ヘタリ明治二年國內動亂ノ際一  
時佛道不歸依ヲ唱ヘ一般廢寺ト相成候處全十二年五  
月一日付ヲ以テ再興出願全歲六月二日認許相成候得  
共十二年間有名無實全廿四年七月中院工事落成古來  
ノ過去簿記モ不分明ニ據リ明治廿六年ノ今日ヲ以テ  
新調之



明治廿六巳年七月中院

真言宗大原山常福密寺

中興開山

河村大忍代

常福寺住職

一代傳燈大阿闍黎法印辨清

(實十月廿日ト  
過去帳ニ在ル)

二代

三代

四代權大僧徒法印快榮

(明和二年酉十月廿五  
日住僧壽六十七歲)

五代傳燈大阿闍黎權大僧都法印上人快辨

(寛政九  
年巳九

月廿八日住僧  
壽五十四歲)

六代傳燈大阿闍黎權大僧都法印快賢

(享和元年酉十  
一月廿日住僧

壽四  
十歲)

一有光寺 明治四年廢寺トナリシ儘再興ニ至ラス

萬延元年宗門帳調

淨土宗 千四百十二人内 男六百七十六人 女七百三十六人

真言宗 四百五十九人内 男二百三十九人 女二百二十人

慶應四年辰三月宗門帳調

淨土宗 千四百六十八人内 男六百九十六人 女七百六十四人

真言宗 四百七十人内 男二百四十五人 女二百二十五人

舊跡

一城山、番屋、赤崎

由緒 元弘ノ頃 御醍醐天皇當國へ御潛幸別府村黒木

御所ニ行在中北條高時カ下知ニ依リテ浦郷村字城山

ト云フ處ニ城ヲ構ヒ佐々木隱岐判官之ノニ在城シ全



村字番屋ト云フ處ニ番所ヲ建テ遠見番ヲ置ク等密ニ御遁レ玉ハンコトヲ恐レテ其防備甚タ嚴重ナリ然ハアレトモ佐々木隱岐判官ノ心中ニハ天ノ恐レヲ思ヒ好キ時機ヲ窺ヒ如何ニモシテ密ニ送り奉ラシ念慮片時モ絶間ナカリシトナリ時ニ浦郷港字赤崎ト云フ處ニ（赤崎ト申スハ誤ナラシ該所ハ商船ノ碇泊スル所アラザルコトハ諸人ノ熟知スル所ナリ編者付記ス避難ノ爲メニハ巧ニ字赤崎ニ碇泊セシメタルニ）伯州船ノ碇泊スルアリ之正シク天幸ナリ天晴ノ便船ナリト人知レス心勇ミテ即チ二人ノ密使ヲ撰ミ黒木御所へ恐ハセ元弘二壬申年八月朔日天皇ヲ密ニ御送り奉ル美田字宮崎ト申處マデハ陸路ヲ御背負奉リ夫ヨリ御船ニ召サセ奉リテ浦郷港碇泊ノ伯州船ニ御乗り移リ玉ヘバ御船ハ港密ニ漕出ニケリ

皇船ノ當國ヲ離ルコト凡ソ十余里許リ沖合ニ出サセ玉フ由ヲ御番所ヨリ申入レケレハ判官大ニ驚轉ノ面色ニテ片時モ早ク追手ノ船ヲ差出セヨト百姓等ニ下知シテ數艘ノ船ヲ拵ヒサセ時ヲ移サス追懸ケ、レモ如何ニセシ皇船ハ順風ニ真帆上ケテ箭ヲ射ルカ如ク見ル影サヘモ微ニテ伯州指シテ過キ行ヌ追手ノ船ハ詮方モナシ勢ナクモ漕戻リシトナリ（古老ノ傳書ヲ寫シタリ）

教育

一教育ノ制度ハ明治五年壬申八月二日大政官第二百十四號ヲ以テ公布セラレタリ

一部内小學校ハ明治七年三月十六日ヨリ開設アリテ舊來ノ寺子屋（文字ヲ傳授スル所ノ名）教授法ニ稍々改善ヲ加ヘシモノニシ



殊ニ一創業ニシテ其方針トシ視ルヘキモノナキハ勿  
 論ノユトナリ然リ而シテ其兒童就學ノ如キモ現行制學  
 齡ニ對スル百分ノ十六以上ニ出デザルハ敢テ怪シムニ  
 足ラサルモノナリ又教員ノ待遇ニ至リテハ尤モ冷淡極  
 ハマルモノナリサレバ教育制ノ名アリテ其實ノ舉ガラ  
 ザル蓋シ廿有余年ノ久シキニ涉リタリ然ルニ明治廿三  
 年十月三十日教育勅語喚發セラレ茲ニ於テ始メテ教  
 育ノ大方針確定亦動スベカラザルニ至リタルハ實ニ萬  
 民ノ幸福ナリト云フベシ  
 本村ハ美田外三村聯合役場ニ編入アリテ教育上ノ管理  
 モ全役場ノ支配ヲ受ケザル可カラサルユト故隨テ其發  
 達モ他ニ比シ層一層遲々トシテ振ハザリシガ明治廿五

年一月一日前記聯合役場ヨリ分離シテ獨立ノ浦鄉村戶  
 長役場トナリシヨリ時ノ戸森脇平作君部内人民ニ對シ  
 勅語ノ主旨ヨリ東洋今日ノ有様ヲ懇々諭示シ恩嚴時  
 ニ隨テ部内ノ發達ニ勉メタリ其間種々ノ反攻アリシユ  
 トアルモ物ノ數トモセス不屈不撓以テ當初ノ成算ヲ遂  
 行シタル結果今日ノ盛況ヲ呈シ隱岐全國ニ頭角ヲ顯ハ  
 シ範ヲ一般ニ示スニ至リタレバ本村ノ高評ハ實ニ顯著  
 ノモノナリ(功績ノ部參看)今左ニ一二ノ統計ヲ表示シテ將來ノ  
 參考ニ供ス

就學成績表

學齡兒童	要目		年別	
	男	女	明治七年	明治十年
	一三五	一三〇	一四六	一四一
	一六三	一五八	二三四	二六一
	二二九	二二五	二二九	二二五
	二二七	二二二	二二七	二二二
	二四七	二四八	二四七	二四八
	二二八	二二〇	二二八	二二〇

明治廿五年 明治廿八年 明治卅一年 明治卅二年



學齡兒童百歩合 スル就學ノ歩合	就學兒童		不就學兒童	
	男	女	男	女
四二	四四	九八	一六四	二五三
九三	一一	一一	一〇〇	二二七
一三〇	六五	七〇	二二七	二〇八
一〇二	一四七	二五一	二五	二四二
三九	四七	二五	四	二二五
一、六	三、四	三、五	九、四	九、九
一、六	三、四	三、五	九、四	九、九
一、六	三、四	三、五	九、四	九、九

教育費 (明治十五年前不明)

年別	金額	年別	金額	年別	金額
明治十五年	七三四八五三	明治廿一年	五〇三一三〇	明治廿七年	八四一四四八
十六年	三五二七五〇	廿二年	三七〇一二四	廿八年	七一〇七五四
十七年	五〇一三五二	廿三年	三九九八七四	廿九年	一、七七九四四三
十八年	二八八五六一	廿四年	五一三四一〇	卅一年	九二三〇一五
十九年	三八一五二九	廿五年	八八九九一五	卅二年	一、八七四六三三
二十年	三二二三七四	廿六年	九〇四九六〇	卅二年	一、七二六八六六

以上累計一万四千拾六圓九拾八錢トナル是レヲ經年拾八ケ年ニ等分スレハ一ケ年金七百七拾八圓七拾貳錢壹厘余ナリ

學校名稱一覽

年月日	學校位置	本郷里	赤ノ江里	三度里	珍崎里
明治七年三月十六日	浦郷學校	浦郷學校	赤ノ江學校	美田部學校	三度學校
全十九年	海士小學分校	全上	全上	全上	珍崎支校
全廿二年四月一日	浦郷簡易小學校	全上赤ノ江分教場	全上三度分教場	全上珍崎分教場	
全廿八年四月三日	本郷尋常小學校	赤ノ江尋常小學校	三度尋常小學校	珍崎尋常小學校	
全三十一年四月一日	浦郷高等小學校				

教員氏名 (首席教員ノミヲ掲載ス)

本郷小學校	赤ノ江小學校	三度小學校	珍崎小學校
氏名: 小出正直 就職年月日: 明治七年三月十六日	氏名: 秋月眞澄 就職年月日: 明治七年九月八日	氏名: 小出正直 就職年月日: 明治七年	氏名: 寺崎三省 就職年月日: 明治七年
氏名: 中川榮 就職年月日: 全十年九月七日	氏名: 山本房吉 就職年月日: 明治八年十月十五日	氏名: 山本房吉 就職年月日: 全九年	氏名: 福井市太郎 就職年月日: 全十一年
氏名: 山本房吉 就職年月日: 全十年三月廿七日	氏名: 馬庭謙齊 就職年月日: 明治十一年	氏名: 秋月眞澄 就職年月日: 全十一年	氏名: 宇津秀馬 就職年月日: 全十四年九月十三日
氏名: 山本晴次郎 就職年月日: 全十七年	氏名: 岡本仲三郎 就職年月日: 全十三年	氏名: 廣江澤龍 就職年月日: 全十四年九月十三日	氏名: 奥山重義 就職年月日: 明治十五年
氏名: 田中景啓 就職年月日: 明治十八年	氏名: 奥山重義 就職年月日: 明治十四年九月十三日	氏名: 奥山重義 就職年月日: 明治十四年九月十三日	氏名: 大西甚太郎 就職年月日: 明治十五年



明治十九年	永見松太郎	全十五年九月	大西國吉	全十九年十二月	間瀬丹次郎	全十五年	新敷壽
明治二十一年	門脇英之助	不詳	西尾市三郎	全廿二年九月	大村友之丞	全十六年	吉野鶴若
明治廿四年 二月十五日	木村常太郎	全上	服部晋現	全廿三年十一月	中西松太郎	全十六年	眞野万次郎
全三十一年 一月十二日	三成松太郎	全上	山本類造	全廿四年二月	奥山信親	全十六年	眞野熊次郎
		明治二十一年	山本式太郎	全廿四年六月	池田七郎	全十七年二月十七日	長谷川松太郎
		全二十二年十二月	景山運平	全廿四年九月	奥山重義	全十九年十二月	奥山重義
		明治廿五年二月廿二日	朔曉榮三郎			全廿四年七月	高橋文祭
		全廿八年十一月	伴 伴			全廿五年九月廿日	小畑次郎吉
		全三十年七月廿一日	高宮安市			全三十年二月一日	横山幸太郎
		全三十一年三月廿八日	渡邊一郎			全三十二年十二月廿六日	内田武一郎
		全三十二年二月三日	平井藤市				
		全卅二年十一月廿九日	大前初若				
		全三十四年一月十一日	泉覺明				

一校舎ハ當初實ニ狹隘ナル辻堂或ハ矮屋ヲ以テ充用シ來

リシモ何ノ顧慮スル所ナカリシガ明治二十五年ヨリ就  
 學ノ増加ト教育ノ必要ナルコトヲ悟ルニ至リテヨリ漸  
 次校舎改築ノ急ニ迫リタルヲ以テ明治三十三年迄ニ殆  
 シト一通リノ事業ヲ結了シ殘ルハ只珍崎尋常小學校ノ  
 一校ナレバ明治三十四年度ノ事業トシテ完結スルノ運  
 ヒナリシナリ

付記

抑モ部内全戸數五百廿戸ナルニ其建設スル所ノ小學校四校ニシテ其  
 費用ノ年々増加スルコト即チ教育費統計表ノ示セル如クニシテ各戸  
 ノ負擔到底堪ユヘキモノニアラス左レハニヤ各校ノ設備不完全ヲ免  
 レサルハ勢止ヲ得サルコトニ屬ス如斯有様ヲ以テ進ニ行キタラシ  
 ハ遂ニ世ノ進歩ニ遅レ常ニ他ノ後ニ付隨セサルヲ得サルコトナルハ



識者ヲ待タスシテ明カナルモノナリ故ニ部内具眼ノ氏ハ一部ノ私情  
ヲ離ナレ公平誠實ニ協同一致ヲナシ之レカ改革ノ方法ヲ講シ部内ノ  
發達ヲ期セラレシコトヲ望ム

(改革) 浦郷尋常小學校及ヒ三度尋常小學校ノ二校トナシ通學道路ノ改  
修ヲ圖ルコト

### 農 業

一昔時ニ在テハ農業ナルモノハ別ニ學術應用ノ途ヲ知ラ  
ス唯土地ヲ鋤耕シ種子ヲ下スヲ以テコト足ルコト、知  
了シタルニヨリ其收穫ノ見ルベキモノナキハ當然ノコ  
トニ屬ス殊ニ目下重要ノ肥料即チ人糞ノ如キハ實ニ其  
處置ニ苦シミ之レヲ遺棄スル等ノ有様ナリ  
農作ノ仕方ハ第一種子ハ最劣等其用ニ堪ヘザルモノヲ

選擇ス第二耕耘除草ハ等閑ニ付シ敢テ顧ミサルコト第  
三施肥ヲ勉メサルコト以上ノ如キ有様ナルヲ以テ何ソ  
ゾ能ク收穫ノ増加ヲ望ムコトヲ得ンヤ然ルニ今ヤ漸ク  
人口モ増加シタレバ隨テ增收ノ計畫ヲ立テサル可カラ  
サル時期ニ迫リタルヲ以テ種々試驗ニ試驗ヲ加ヘ實驗  
ニ實驗ヲ加ヘ農作ノ研究ヲ勉ムルヲ以テ昔日ニ比シテ  
ハ同日ノ論ニアラサルコト勿論ナリト雖モ未タ以テ安  
心スベカラサル點多數アリ其内最モ甚ダシキハ害虫ノ  
驅除ナリ螟虫及「ウシカ」虫ノ發生スルコトアル場合其他  
ノ害虫ヲ認ムルヤ直ニ氏神ニ祈リ業ヲ休ミ酒等ヲ飲ミ  
若クハ鐘太鞞即チ鳴物ヲ打鳴ラシ大勢田畑ヲ通行ス之  
レヲ名ケテ虫送りト云フ以上ノ法ヲ行ヒ除虫ヲ認ムル



コト出來サルトキハ之レ到底人力ノ及ハサルモノト決心スルヲ以テ食料ノ欠乏ハ定例ノ如シ  
近年ニ至リテハ害虫驅除スルニハ種々ト講究シタル末注油驅除法ヲ實施獎勵スルコト、ナシタルヲ以テ大ニ其成績好良ヲ呈シタレバ是レヨリ益々人工驅除ヲ行ヘテ虫害ノ患ヲ除キ農學ノ理ヲ一般ニ覺知スルノ途ヲ講シテ增收ヲ計畫スルコトニ怠ラサルコト尤モ急務ナリト信ス(人口表ヲ見テ悟ル所アルヘシ)

### 漁業

一部内漁業ノ重ナル者ハ鰯鯖鰯鱒鰯等ニシテ其漁獲方ハ鯖鰯鱒鰯小鰯等ハ夫々ノ引網ヲ使用シ鰯ハ挫繩釣ヲナシ鰯ハ「タラシ、カマラ、エンガラ」等ノ類ヲ使用スルガ

其内網使用ニ就テハ隱岐全國中第一位ニ在ルモノナリ鰯ハ隱岐國特有ノ物産ナリシカ古來其製造ノ方法等區々ニ涉リ販路モ狹隘ニシテ價格亦低廉ナリ然リ而シテ價額ハ壹束ニテ何程ト定マリ居リシカ其后稍々人智開クルニ隨ヒ明治十年頃ニ至リテヨリハ百匁何程ト價格標準ニ異動ヲ來タシタリ之レガ爲メ乾燥不充分トナリ其結果製品腐敗シ遂ニ聲價ハ地ニ落ナタルヲ以テ其善后策トシテ明治二十年全業組合組織ノ官令アリ然ルニ漁民ハ前途ノ患ヲ悟ラス只一時ノ僥倖ヲ得ント謀リテ大ニ之レヲ批難セシモ具眼者ハ斷然之レヲ退ケ組合ヲ組織シ製品ノ改良ヲナスヲ得テ大ニ聲價ヲ揚ゲ内外人ノ信用ヲ博スルニ至リタリ



明治三十一年ヨリハ海産物鑑詰ノ業開ケ一層水産事業  
ハ多忙ノ氣運ニ向ヘタリ  
現下水産物改良發達ヲ圖ル爲メ隱岐水産組合ノ設ケア  
リテ水産業ノ改善ヲ喚起シツ、アリ  
一隱岐水産業現下ノ情况ヲ概標スレバ遺憾ナガラ未開ノ界  
ヲ脱セザルト云フノ外ナカラシカ何ヲ以テ然ルカ未ダ  
以テ銳利ノ漁具ヲ使用スルニアラス魚族ノ養殖ヲ計リ  
タルニアラス製品ノ改善(ヲ除ク)ヲ普及シタルニアラス  
漁業上ノ試験ヲナシタルモノモ殆ントアルナシ魚招林  
ヲ設ケタルニアラス漁業上資本運轉ノ機關ノ設ケアル  
ニアラス水産學智識ヲ養成スルノ學校ノ設備アルニア  
ラス其他設備ノ不完全ハ枚舉ニ遑アラズ茲ヲ以テ未開

ノ界ヲ脱セストハ云フナリ然リト雖モ之レヲ五六十年  
以前ニ比シテハ大ニ進歩シ殊ニ鰯改善ニ至リテハ其成  
績好良ニシテ内外人ノ信用ヲ得隱岐唯一ノ國産タル資  
格ハ之レヲ以テ保持セラレタリ  
以上ノ如キ資格ヲ得タリト雖モ世ノ進歩ハ今日ニ安ス  
ンスルモノニアラサレハ幾多ノ改善ヲ加エ世ノ進歩ニ  
遅レサランコトヲ要ス

### 牧 畜

一牧場及牛馬頭數左ノ如シ  
老屋牧場反別百六拾壹町貳反步  
由良牧場反別貳百七拾五町九反步  
長尾牧場反別貳百參拾貳町步



赤尾牧場反別貳百拾六町壹反歩  
合計反別八百八拾五町貳反歩

平均數	牛		計		馬		計	
	牝	牝	計	計	牝	牝	計	計
	三二	七二八	七五九	一九	九五	一一四		
明治二十四年調	九四	八三二	九二六	三〇	一七八	二〇八		
明治二十八年調	八一	八三六	九一七	三七	二四九	二八六		
計	二〇六	二、三九六	二、六〇二	八六	五三二	六〇八		
平均數	六九	七九九	八六八	二九	一七四	二〇三		

牛馬平均數計千七拾壹頭

年々牧場ニ使用スル反別四百四拾貳町六反歩牛馬壹頭

ニ對スル牧場反別四反壹畝歩余ニ相當ス

一古來牧場ニ界スル耗作地ハ各自單獨ノ土地ヲ限リ柵垣  
ヲ設ケ牛馬侵入ヲ防カントスレモ其各自負擔柵垣ノ延

長ニシテ到底之レカ完全ヲ期スルコトヲ得サルヨリ牛  
馬ハ田畑宅地ノ用捨ナク縱橫無盡ニ徘徊シ干物作物ヲ  
喰荒ラシ其亂暴至ラサル所ナシ農民ハ之レカ救濟策ノ  
考案ナキヨリ果テハ牛馬ノ足ヲ縛シ又ハ六尺有余ノ木  
材ヲ頭上ニ縛付シ彼レカ進退ノ自由ヲ妨ケンコトヲ計  
リ居ルノミ勿論其時代ニ於テハ牧畜ノ改良杯ト云フ  
ハ夢ニダモセズ茲ニ於テ天保十年ノ頃時ノ庄屋渡邊儀  
藏氏ナル者之レカ救濟策ヲ考究シ其結果トシテ各自單  
獨ノ柵垣ヲ廢シ共同柵垣ノ制ヲ定メタレバ各自柵垣負  
擔大ニ減シ實ニ舊時ノ十分ノ一ニモ相當セサルコトト  
ナリシニヨリ其柵垣完全ヲ期スルコト容易ナルヨリ之  
レヲ實行シタレバ牧場ト耕地トノ區域茲ニ始メテ畫定



確然亦犯ス可ラサルニ至リタレバ其后之レカ害ヲ被フ  
ルヲナクシテ今日尙ホ繼續シ以テ良法ト認定シタルハ  
氏ノ力大ナルヲ認ム

一 近來牛馬ノ改良ヲ爲スコトニ勉メタレバ前日ニ比シテ  
ハ大ニ見ルヘキモノアリト雖モ概シテ之レヲ云ヘバ漸  
ク其端緒ヲ開カントスルニ在リテ前途尙ホ遼遠ナラン

### 衛生

一 公立浦郷病院ハ明治二十九年十一月廿日開院全年十一  
月十八日船山梅太郎氏院長ニ任用セラレ衆望益々盛ン  
ナリ  
病院設立ニ就テ大ニ盡力シ浦郷村ノ面目他ニ超越シテ  
今日アルヲ致サシメタル者ハ時ノ戸長森脇平作氏及眞

野治郎一氏其他村會議員諸氏ノ一致以テ効ヲ奏セシメ  
シナリ

一定設傳染病隔離病舎ハ明治三十一年九月十二日建設方  
ヲ指定セラレ明治三十三年三月十日竣工セリ左ニ其棟  
數及工費ヲ掲載ス

病舎二棟 消毒所一棟 物置一棟 死室壹棟  
事務所一棟

此工費二千六百拾七圓九拾貳錢九厘

### 一 傳染病

明治二十六年全廿七年赤痢病大ニ傳染シ其結果左表ノ  
如シ

年別	發病月日	患者	死亡	全治	惣失	額一縣稅補助一各戶負擔一義損金
	修局月日					〇三十



二六	九月廿二日	二二二	三三三	一七九	一、二二一、九六〇	十月ヨリ縣立	五五六、一〇〇六五五、八六〇
二七	七月十七日 十月九日	三〇三	四七	二五六	一、二七八、〇九二八五八、八四二四一九、二五〇	避病院設置	

明治二十六年ノ赤痢病傳染ノ原因ハ赤ノ江里岩根彌太郎ナル者西郷ニテ感染シタルモ全地醫師ニ於テ誤診シタル爲メ數日間其儘日子ヲ經過シタル爲メ病毒諸方ヘ蔓延シ一日幾數名ノ患者發見シ續イテ各里ニ傳染シ其猖獗誠ニ絶大ノモノナリシナリ

全十月十四日暴風雨トナリ仮病舎ハ風波ノ爲メ破壊轉倒セントスルニ因リ百有余ノ患者ヲ一時自宅ヘ移スコト、シタレハ其混雜名狀スベカラサル有様ニテ當時三度避病舎ハ轉覆シタリ

村經濟 浦郷村費支出精算表

明 治 年 度 別	費 目	衛生費		勤業費	積立	其他
		病院費	其他			
二五	戸長役場費	六三八、三三五	八八九、九五	〇	〇	一三三、三〇
二六	會議費	二、四五〇	〇	〇	〇	一〇九、〇六〇
二七	教育費	二、一〇〇	〇	〇	〇	一〇九、〇六〇
二八	〇	六四二、二六八	〇	〇	〇	一三三、七三〇
二九	〇	六七五、七一九	〇	〇	〇	二九、九三〇
三〇	〇	八三三、〇一〇	九、九〇六	三六、七三四	一〇〇、〇〇〇	五五五、〇九四
三一	〇	一、一三四、七九五	九、九〇六	八七、四三〇	二二〇、〇〇〇	八八二、三三三
三二	〇	一、〇五三、三四〇	一、七五〇、〇三九	四一七、二四四	二〇〇、〇〇〇	四〇三、九四〇
三三	〇	一、一三四、七九五	一、七五〇、〇三九	二、六二〇、〇一九	三〇〇、七三三	八六五、一六三
計	平均	六、二四六、八三九	九、六五二、一〇四	五、七五五、六四二	八三三、六五七	二、五六一、四三三
平均	平均	六、〇八五	一、二二六、三七七	一、四〇一、七五八	七五、七五五	一、六四、五三二

村費歳入賦課金戸別割負擔額決算表

明 治 年 度 別	要 目	戸 別	割 負擔 戸 數	平均 一 戸 當 金	附 記
二五	五	一、四〇五、三七三	四八五	二、八九八	



二	六	一、五七〇、七六四	五〇二	三、一二九
二	七	一、六一二、〇四七	五〇五	三、一九二
二	八	二、二四一、九一〇	五〇三	四、四五七
二	九	二、二四一、九四三	五〇六	四、四三一
三	〇	三、二四三、四五七	五二二	六、三三五 前年ニ於テ病院設立ノ爲メ増加
三	一	四、六九〇、五七八	五二五	九、一〇八 學校建設ノ爲メ増加
三	二	五、〇七六、六四七	五一九	九、七八二 隔離病舎建設ノ爲メ増加
合	計	二二、〇八二、七一九	四、〇四七	四三、三三二
平	均	二、七六〇、三四〇	五〇六	五、四一七

勞役賃金表

文政五年	明治十年	全十五年	全二十年	全廿五年	全三十一年
大工百廿文	拾參錢	拾五錢	拾八錢	貳拾壹錢	參拾五錢
日雇百五文	八錢	拾錢	拾貳錢	拾五錢	貳拾五錢

米價調査表

正德三年	寬延三年	文政五年	天保十五年	慶應二年	明治十二年	全廿二年	全廿六年	全三十年	全三十一年
銀九十八匁	錢五貫四百文	全五貫七百文	銀五十五匁九分	全百四匁一分	金拾圓	全六圓八拾錢	全八圓九拾錢	全拾貳圓七拾五錢	全拾六圓參拾五錢

備考 米壹石ニ對スル代價ナリ

天保七年ニハ米壹石錢三十五貫文ナリ

明治二年ハ米壹石錢壹貫五百文ナリ

物産

米、麥、大豆、小豆、甘藷、蕎麥、繭、牛、馬、鯨、鰯、鯨、鯧、鮪、鮒、藻、葉、和布、海苔、等ナリ

從軍者

(明治廿七八年日清役ニ從軍セシ者)

勳八等瑞寶章	等	御下賜金	兵種官等	氏名
勳八等瑞寶章	不詳	三	三等軍吏	眞野鶴若
勳八等瑞寶章	金一時參拾圓	二	二等看護長	眞野熊次郎
勳八等瑞寶章	金全五拾圓	近衛軍曹		間瀬辰次郎



全	上	不詳	信號兵曹	小板寅次郎
全	勳八等白色桐葉章	金五拾圓	歩兵一等卒	魚谷岩次郎
全	勳八等瑞寶章	金參拾五圓	海軍三等船匠手	吉野源造
全	上	金參拾五圓	歩兵一等卒	向原鐵次郎
全		金貳拾五圓	全	鶴谷源太郎
全		金貳拾五圓	全	來海半太郎
全		金貳拾五圓	輻重輪卒	吉谷乙次郎
全		金貳拾五圓	全	島崎龜次郎

献金者

明治二十七八年日清戰役ノ際軍資金ノ内へ左記之通り獻納金ヲナシタルハ誠ニ殊勝ノコトドモナリ

一金壹圓也

中川 榮

一金壹圓也

中川 ヒ サ

効蹟者

一浦郷村戸長森脇平作氏ハ明治廿八年島根縣知事ヨリ教育上ニ對スル効蹟ヲ表章セラレタリ

日本赤十字社員

一正社員

中島万次郎	真野治郎一	真野彌三郎
真野源太郎	梶谷總太郎	柏 彌 十
森脇平作	山本 筆三	真野 豐 若
永徳新三郎	仁井友次郎	真野又太郎
奥山重義	北 岑太郎	玉木壽一郎
岩佐久一郎	三成松太郎	廣澤松之丞

一賛助社員



眞野 貞男	小 仲源 太郎	廣 中德 次郎
油 谷 惣十	吉 田岩 次郎	眞 野權 三郎
魚 谷乙 次郎	渡 邊熊 次郎	澤 見重 三郎
眞 野才 次郎	渡 邊 英 夫	佐 藤德 次郎
岩 根辰 次郎	堀 川岩 次郎	森 下 爲 市
日 當 淺 造	長 府瀨 四郎	常 盤善 太郎
重 谷伊 勢太郎	大 空豐 次郎	玉 川直 次郎
間 瀨 愛 七	小 出 正 直	藤 谷 熊 八
小 出房 太郎	若 松甚 太郎	松 谷 常 若
眞 野 多 市	眞 野 必 俊	角 谷 鶴 若
村 尾増 太郎		

終身正社員

船山梅太郎

飢 饉

人皇百十八代中御門天皇御宇享保六年大凶歳

人皇百十九代光格天皇御宇天明三年ヨリ全八年マテ大飢

饉原因大旱ニ引續キ洪水

人皇百二十代仁孝天皇天保七年丙申大飢饉原因霖雨天保

四年五月ヨリ八月マテノ間晴僅カ十二三日ナリト云フ米

一升代三百五十文ナリシト

明治元年凶荒アリ原因内亂ト天候ノ不順ナルニヨル米一

升ノ代金一貫五百文マテニ上騰シタリ

以上ノ凶荒ニハ細民實ニ糊口困究ノ慘狀一方ナラサリ

シナリ



雜部

一 舊幕府時代ニ於テハ殿様(知事ニ同)郡代代官(島司郡長ニ全シ)其他諸役人部内ヲ巡廻スルニハ別ニ旅費ヲ要セス至ル所ノ庄屋(全シ長)役宅ニ於テ左ノ通り優待ヲ爲スコト、ナリ居タリ而シテ其道中行列モ最ト嚴カニシテ鳥毛鎗長刀駕乗物ニテ進ミ行先驅ハ下ニ下ニ下知ヲナス此ノ場合ニハ一同土下座ヲナシ此ノ一行通行ノ後ニアラサレバ各自進行スルコトノナラサル制ニシテ實ニ平民ニハ乘馬ハ勿論袴割羽織足袋皮緒下駄木履等ヲ禁セラレ實ニ人類外ノ動物ノ如キ有様ナリ

一 御兩殿様並船改步劫獻立歳暮年頭五節句作初穗進物之扣書 浦之郷公文所

御兩殿様獻立扣但當村ヨリ燒火山エ御參詣ノ節ハ玉子堅ク無用ノ事ニ候間可心得候事

御兩殿様御晝獻立 三寶 雜煎 盃(冷酒千) 吸物(小鯛)

御酒 硯蓋(盛合) 鉢(鯛サシミ) 平鉢(鯛漬燒)

膳部 飯 汁(ツミイリ、イチヤウ、大根、チブカ) 坪(ユクシヤウ)

皿(生牙、鯛糸造、白髮大根、茗荷、ミシマノリ)

二之膳 二ノ汁(センクスシ、椎茸、引牛房) 猪口 平(野ヤキ、千牛房、椎茸、子イモ、コンニヤク)

茶碗(ハンペイ) 小皿(味噌漬) 大皿(クスシ昆布、椎茸、大野燒、鯛、牛房、干瓢、玉子厚燒)

御兩殿様御泊リ獻立三寶 雜煎 盃(冷酒千) 吸物(小鯛)

御酒 硯蓋(千牛房、タコ、椎茸、カンヒヤウ、スリモノ、水コンニヤク、ソラ豆、ミヤウカ) 鉢(鯛漬燒)

本膳 飯 汁(アヲレク、スシ、イチヤウ大根、青モノ) 坪(ユクシヤウ)



皿 (鯛生造)

二之膳 二ノ汁 (椎茸、水コソノヤク、  
セソクズシ、 猪口 (カラシアイ、  
ソラ豆、)

平 (豆腐、千牛房、ミズナ、  
小イモ、スリ物、) 茶碗 (アンカケ、  
大カブケ) 小皿 (鐵鉋液、  
茄子)

大皿 (山ノ芋、鯛、牛房、水コソノヤク、クズシ物、  
キクヲグ、干瓢、フキ、昆布、)

朝飯 茶ノ子 (赤飯)

膳部 一汁三菜

船改御廻ノ村獻立歩効獻立等夫々格式アリ(略之)

一 正月御役所エ進物但歳暮モ全斷

御郡代 小豆三升 樽

御代官 小豆三升 樽 鯛代九十文

御目付 小豆二升 樽 鯛代三十文

元方 小豆二升 樽 鯛代三十文

點檢 小豆二升 樽

御番屋 小豆二升

往來 小豆二升

御船頭 小豆二升 樽

大庄屋 小豆二升 樽

一五節句進物

御郡代 大豆三升

御代官 大豆三升 鯛代九十文

御目付 大豆二升 鯛代三十文

元方 大豆二升 鯛代三十文

點檢 大豆二升

往來 大豆二升



御番屋	大豆二升
御船頭	大豆二升
大庄屋	大豆二升
一作初穂但夏小麥秋大豆	
御郡代	大豆七升
御代官	大豆七升
御目付	大豆五升
元方	大豆五升
點檢	大豆五升
御番屋	大豆四升
往來	大豆四升
御船頭	大豆五升

（是レハ年行司ヨリ差出ス事）

大庄屋	大豆五升
御兩殿様御廻村御禮	
御郡代	大豆三升
外ニ御添役二升ッ、	
御代官	大豆三升
一船改御禮	
點檢	大豆二升
大庄屋	大豆二升
一步蒞御禮	
元方	大豆二升
添役	大豆二升
大庄屋	大豆二升
一御暇乞	
御兩殿	大豆三升宛
元方	大豆二升

一嘉永七年甲寅閏七月御役所ヨリ申渡左ニ記載ス



覺

一衣食住並ニ身持稼等ノ儀ハ前ヨリ度々被仰出御制禁ノ筋モ有之ニ付其節々相觸候ハ悉承知可罷在筈ニ候處年月ヲ經候ニ隨ヒ自然弛ミ怠リ候哉近年兩島男女奢之風俗ニ相成島中衰微之甚歎敷次第ニ候當島ノ儀ハ諸事不自由ノ島國ト申儀ハ兼テ公邊へ申達御成箇ハ勿論其外万々御宥免ノ御仕向ニ候得ハ如何ニモ邊鄙ノ風俗ニ無之候テハ公邊へ對シ不相濟事ニ候勿論島國之義ニ候得ハ隣國ノ無見合申合ニ寄候テハ如何様ニモ質素ノ風儀ニ可相成候處無其儀別テ衣服ノ義ハ御定メモ有之事ニ候處國柄不相應美麗ノ衣服令着用候者モ有之哉ニ相聞へ銘々身元ヲ令忘却言語同斷不埒ノ事ニ候右ハ追々締合

申渡猶下ヨリモ願出候ニ付テハ精々申渡事ニ候得共兎角締合不行届候哉ニ相聞畢竟村役人右心得等閑故ノ儀不埒至極ノ事ニ候既ニ先年伺ノ上在島御役人都テ締服令着用候段ハ申渡島中承知可罷在事ニテ是等ノ義モ島中へ引移リ候様ニトノ主意ニ候得ハ兎角實意ニ打込リ與得令考量都テ奢ケ間敷儀無之以來急度締合行届候様可申渡候若シ又村役人トモ不能了簡ノ儀モ有之候ハ其段可申出候

一定例神事祭禮並ニ遷宮供養等ノ儀ハ格合モ有之先規ノ通り彌無違亂可取行儀ハ勿論ノ事ニ候處間ニハ練物俄之賑ヒ等イタシ候趣此等ハ自然他村ノ見合樂ニ美惡ヲ争ヒ候ヨリ次第ニ花美ノ風儀ニ引移リ村々諸雜費相嵩



ミ小前ノ者共ニ至候テハ甚々令難儀候趣キ相聞以ノ外  
ノ事ニ候以來別テ取締申合先規ノ通ニ取行ヘク様可致  
其他年始五節句並吉凶ノ經營鎮細ノ事ニ至ル迄可成丈  
締合行届候様可致候若心得違ノモノモ有之候得ハ急度  
越度可申付候

右之通趣天保三辰年相觸其節請書等差出候處追々年數經  
候ニ隨ヒ自然弛ミ怠候哉ニ成行候様相聞候條村役人共實  
意ヲ以テ村々人別へ不漏様可申渡候條以上

壬寅七月十日

山岡善右衛門

井出彌一兵衛

大庄屋官藏殿

編者ノ愚見

本村過去數十年以前ヨリ現在ニ至ル諸般ノ情况ヲ觀察ス  
ルトキハ大ニ進歩シタルニ相違ナシト雖トモ之レヲ知夫  
郡ノ首府タル浦鄉村トシテ視ルトキハ却テ遜色ナキ不能  
本村ハ只ダ世ノ成行ニ從ヒテ進ムノ外アルナキモノ、如  
シ如斯シテ進行シタラシニハ終ニ社會ノ生存競争ニ打敗  
ケ亦タ立ツベカラサルニ至ルヤ識者ヲ要セスシテ明カナ  
ルコト、信ス

凡ソ社會ノ盛衰突出ヲ以テ成ルニ非ラス漸ヲ以テ成ル者  
ニシテ其原因甲世ニ起テ其結果乙世ニ熟スル者ナリ即チ  
世ノ盛ナル盛ナルノ日ニ盛ナルニ非ラズ蓋シ必ズ由テ起  
ル所アリ世ノ衰フル衰フルノ日ニ衰ヘズ亦必ズ由テ兆ス  
ル所アリ實ニ今後村民ノ盛衰消長ハ今日ノ有志者及ヒ青



年諸氏ノ身上ニ掛レリ有志者及青年諸氏ノ責任亦重シト謂フベシ茲ニ於テ確固不拔ノ村是ヲ撰定シ之レカ遂行ヲ期スベキモノナリ今左ニ愚見ヲ列舉シテ參考ニ資セントスルニ在リ

- 一人口ハ年々歳々増加シテ停止スル所ナシ土地面積ハ依然トシテ舊ノ如シ之レニ改良改善ヲ加ヘタルト雖モ之レヲ以テ一ニ頼ミトスルニ足ラスト信ス
- 一原料ノ供給ニ差支ナキモノヲ選ビ工業ヲ興シ之レヲ以テ村是ノ一トナスコト
- 一水産業ハ固定ノ村是トスルニ足ラサルモノト信ス
- 一道路ノ改修ヲナシテ重ニ小學生徒通學ノ便ヲ圖ル
- 一部内赤ノ江及ヒ珍崎尋常小學校ヲ浦郷尋常高等小學

校ニ合併シ現在ノ位置ヲ改選シテ以テ教育事業ノ革新ヲ計畫スルコト

- 一學校教員ハ部内ニ於テ之レヲ養成スルコト
- 一婦人ノ風儀改善策ヲ講究スルコト

以上ノ諸項ヲ一言ニ謂ヘバ即チ左ノ如シ

- 一殖産工業ノ發達ヲ期スルコト
- 一農事ノ改良進步ヲ圖ルコト
- 一工業ノ新興ヲ喚起スルコト(機業ノ類)
- 一水産業ノ發達ヲ計畫スルコト
- 一教育事業ノ革新ヲ圖ルコト

右之諸項ヲ遂行スル爲メ有志者全力ヲ注キ不屈不撓以テ事ニ當リ外來人タル村長トカ何ントカ云フ様ナルモノニ



依托スヘキモノニ非ラズト覺悟アラシクニトナ望ム

明治三十四年五月十三日印刷  
明治三十四年五月十四日發行

(非賣品)

編輯者 渡邊周太郎

島根縣知夫郎知夫村  
千百五拾七番地

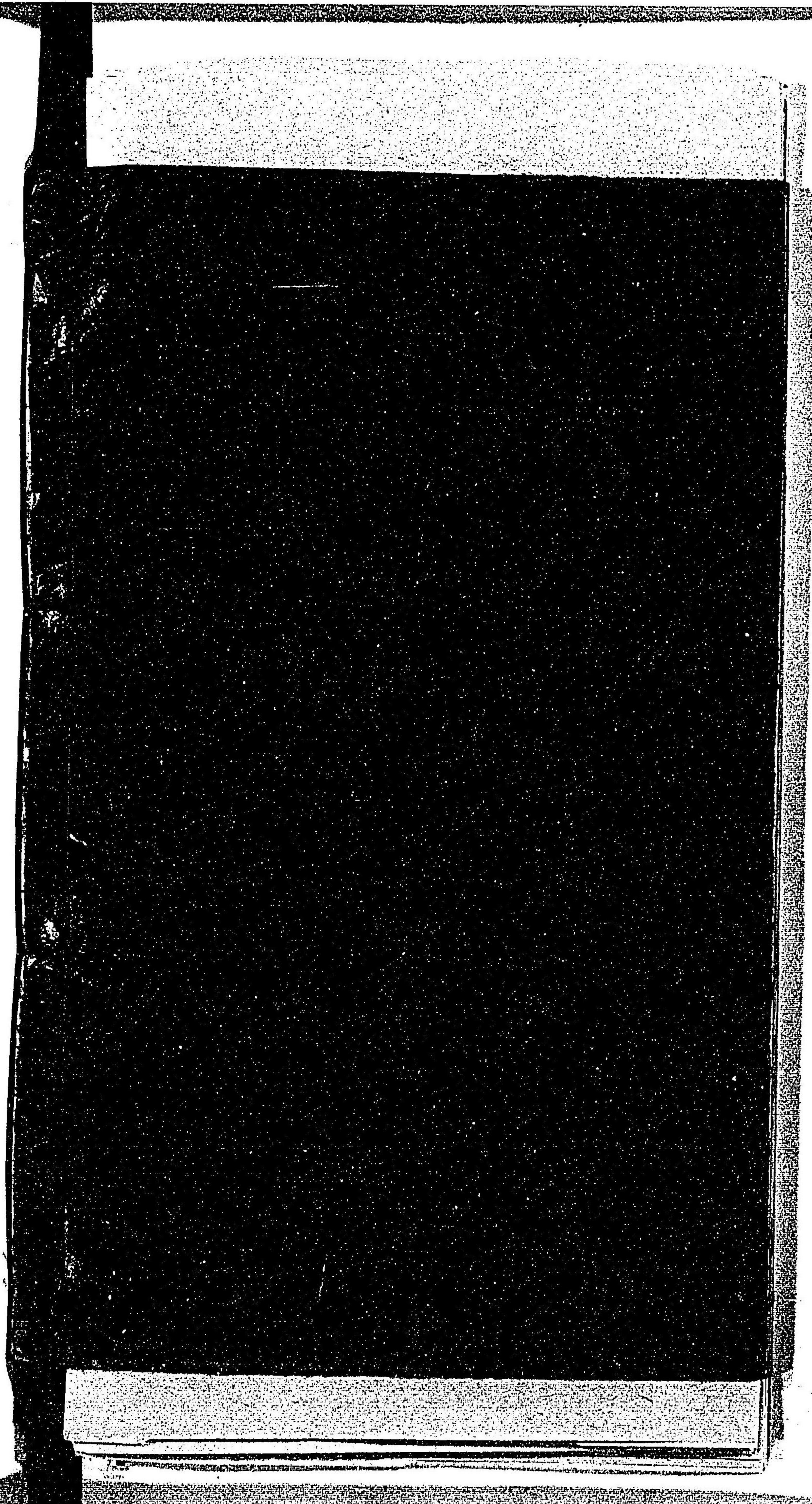
發行兼印刷者 中村健太郎

島根縣周吉郡西郷中町  
貳百拾七番屋敷ノ堂



116  
100







025906-000-2

116-100

知夫郡浦郷村要録

渡辺 周太郎/編

M34

ADC-3463

